

海音寺潮五郎

天と地と

天
と
地
と

中
の
巻

海
音
寺
潮
五
郎

天と地と 中の巻

定価 四二〇円

第一刷 昭和四十三年七月二十四日
第五刷 昭和四十三年十月二十五日

著者 海音寺潮五郎

発行者 朝日新聞社 大田信男

印刷所 凸版印刷株式会社

発行所 朝日新聞社 東京名古屋大阪北九州

©一九六八年 海音寺潮五郎

天と地と 中の巻／目次

雪来る

七

仁王おどり

四

浅緑

四

無残やな

六

鉄砲初見

九

寝ものがたり

七

篠懸

二五

十分なる手ごたえ

一三

演出

一五〇

悪いおなご

一六

送り狼

一八

島の城

二〇

正奇虚実

二〇

追想曲

二七

夢想

二五

流水

二七

四如の旗

二九

愛欲と信仰

三七

題字 海音寺潮五郎

装丁・挿絵 中尾進

天と地と

中の巻

雪来る

きげんの悪かった晴景も、風呂に入ってあたたまり、直垂姿にくつろぎ、その間にもうけられた酒席について数盃をかたむけると、いくらかなこんだ顔になった。

そのうしろに晴景の太刀を持ってひかえている源三郎も、いつもの血色をとりかえした。これは白小袖に緋の中着をかかぬ、上に紫地に乱れ散る桜の花びらを色糸で繡った小袖を着、花桐を金銀の糸で繡ったはかまをはき、目のさめるようなあざやかないでたちだ。女よりもまだ華麗で艶冶であつた。

晴景といい、源三郎といい、合戦の場に来ているという自覚がまるでないようだ。過重な荷駄は機動力をにぶ

らせ、戦闘力を殺ぐゆえ、行軍には戦闘に必要欠くべからざるもの以外はたずさえてならないというのは陣法の鉄則だ。

(彈正様とこの寵童とのだて衣裳を運ぶため、小荷駄がかりはずいぶん苦勞をしたにちがいない。ものの性質上、彈正様からとくべつきびしい仰せつけがあつたろうから、一兩人が専心にあたつたと見てよい。五百人の勢のなかの一兩人だ、相当な犠牲だ)

と景虎は不愉快だったが、今はそんなことを口にしてはならない時だ。おさえて、接待に気をくばった。彼は具足の上に陣羽織を着たままだ。戦陣の法として、これではなければならないと信じていた。

よいほどに酒のまわった頃、宇佐美定行が膳をはなれて、晴景の前に出て来た。

「喜平二様へ盃をたまわりとうございます」

晴景は無言で盃をとりあげ、のこっていた酒をすて、景虎にさし出した。やはり無言だ。あたり前なら、兵を挙げた決断と緒戦の勝利とにたいして褒詞があるべきところだ。

景虎は怒りに顔が熱くなったが、定行が自ら瓶子をとり、うながすように顔を見たので、おさえて、いざり出した。

「ありがたきしあわせ」

両手で受けると、定行が瓶子をかたむけてとくとくといでくれた。仰いで、しずくものこさずのみほした。定行はまた言う。

「お流れはてまえにいただきさせていただきます」

定行にさし、酌をしてやった。

「頂戴いたします」

定行はお願いいただき、しずかにのみほし、懷紙を出して盃をくるんで鎧の引合せにおさめ、ひげを拭いた後、晴景を仰いだ。

「雪中の陣押し、お疲れのこととは存じますが、敵の襲来が今明日をはかれぬ時でございますれば、さしあたっての戦さ立てをしていただきとうございます」

「うむ」

晴景はうなずいたが、ふと出たあくびをおさえて、ハハと笑った。ごまかすような笑いであった。

「今日は少しくたびれた。あくびなどして、ゆるしくていい。——ところで、戦さ立てじゃが、それはもう立っているのじゃろう。これほどのことを企てるからには、前もってそれは立っているはずじゃ。ましてや、喜平二は弱年でも、そなたほどの軍法者がついているのじゃ。立っていぬ道理はあるまい。今このきわになって、戦さ立てのどうのとあわてることはなかるうでないか」

最初の言出しはおだやかというより、めんどろを避けて早く休息したい気持の露骨に出た、投げやりなものであったが、次第に皮肉な調子を帯びたものになって来た。

定行はあいそよく笑った。

「戦さと申すものは一瞬毎に形勢の変化して行くものがございますから、戦さ立てもそれに応じて変える必要のあることは、殿もよくご承知のことでございます。それに、この戦さの大將軍は殿なのでございますから、殿の思召しをうかがいませんで……」

ことばの途中を晴景は容赦なくさえぎった。

「この戦さは、おれに何のことわりもなくはじめられた

ものだ。これほどの大事をその方共勝手におこしておいて、今さらおれを大將軍などに祭り上げて、おれは引受けんぞ。おれはただこの戦さにその方共が負けては、せつかくこままで保って来た春日山長尾家の浮沈の大事となると思うたればこそ、出て来たのじゃ。よろこんで出て来たと思うでないぞ！ 守護代を守護代とも思わず、兄を兄とも思わず、利用だけしようとの根性、おれは不快じゃ！」

言っているうちに情が激して来て、しまいにはたたきつけるようなはげしいことばとなった。

景虎には言いぶんがある。兄が時機を待つというを名として、小康に安んじ、酒色にふけてばかりいたればこそ、自分はせん方なくこの挙におよんだのだ。この夏にもわざわざ敵地を通過して春日山に行つて諫言までしたのに、言いぬけばかりしてまるで聴いてくれなかったではないか、こうして起つたのは、やむなきことではないかという言いぶん。その上、兄を城門に迎えた時からおさえにおさえしている不満がある。怒りは一時に心頭につき上げてきた。キッと兄をにらんで、言出そうとした

時、定行が言った。

「お叱りまことに恐れ入りました。おさしずをいただく事をおこしましたこと、お怒りまことに道理でございます。いく重にもおわび申し上げます。しかしながら、これは手順が狂いましたため、かようなことになったのでございます。拙者共はじめの所存は、当城の修築をいたしました上で、おさしずを仰いで旗上げするつもりであつたのでございますが、三条の早耳に聞きつけられ、先ず押寄せられましたので、次第があと先になつてしまつたのでございます。決して言いぬけを申しているのではありません。ことのはじめからご相談相手となつている拙者が、この前の合戦に間に合わなんだことをもつても、ご推察いただきとうございます」

論理的でありながら、やわらかで、鄭重で、ふわりふわりと軽くるみこむような調子だ。情景もきげんをなおしたが、景虎の怒りもおし伏せられた。

すかさず、定行は景虎をふりかえつた。

「喜平二様、おわび申されませい」

景虎は両手をついた。

「申しわけございません。いたし方なかったのでございます」

無念ではあったが、はつきりとわびた。

晴景はしぶい顔で、だまっている。機略もなければ、淡泊でもない晴景は、手のひらを返すように打ちとけたことは言えないのだ。

「わびごと、お聞入れいただけましようか。ゆるすと、ひとことたまわりとうございます」

定行はうやうやしく言ったが、気合というものである。晴景はついなすいた。

「聞けば道理でもある。この度はゆるそう」

礼を言ったあと、定行はまた戦さ立てのこずを持出し、その結果、晴景が大手の主将となり、景虎が搦手の主将となって、城を守備することになった。三条から栃尾盆地への入口に構築した諸寨にはそれぞれ二、三十人ずつをこめたが、これは一防ぎしたらすぐ間道を通って本城へ引き上げて来る手はずにした。

計定まった後、晴景の名で、さらに付近の豪族らに催促状を出したことは言うまでもない。

二

晴景の人望はなくなっているとはいえず、守護代という名前にはまだまだ權威があった。催促に応じて馳せ参する豪族らが相ついで。中にも上田の城主長尾房景が宗徒の勇将四人に千人の兵を授けてつかわしてくれたのが、人々の意を強くした。

しかしながら、三条方も手をこまぬいて傍観はしていない。利をもって豪族らをさそったから、これに応じて三条方に馳せ参する者もまた少なくなかった。

四勢力の保ち合いで小康を保っていた越後の国は、今や栃尾と三条を中心にして真二つにわれ、風雲の場となった。一波動けば万波したがって動くとの宇佐美の策謀通りになったのであった。

味方する豪族らの多いのに気をよくした晴景は、「この小城に居すくんで敵の寄せて来るのを待つより、こちらからさか寄せして行こう」

と主張し、同意する豪族らも少なくなかった。「守護代の殿のご意見、しごとと存じます。仔細は、間

もなく根雪が来て、両軍ともに動けぬようになりませんが、冬を越させては、勝ちを両端にかけて形勢を觀望している者共のうち敵に味方する者が多くなり、味方不利となりましょう。とかく、根雪の来るまでに敵の息の根をとめるがようござる」

と、その連中は言うのだった。

この主張にたいして、定行は反対したが、決して真向から論破するようなことはしない。

「彈正の殿の仰せ、各々のご意見、一々もつともしごくでござる。仰せの通り、冬を越させては敵に勢いをつけてゆゆしきことになります。しかしながら、敵味方の勢をはかりくらべてみますと、残念ながら味方ははるかにおとりです。各々にむかつて兵を説くは釈迦に説法のきらいがあつて、おもはゆいのでござるが、一応お聞きと願います。およそ戦いの法として城にこもる勢を攻むるには十倍の兵がなければならぬとは、各々のすでによくご承知のことでありますが、無念ながら味方は敵の四が一にも足りませぬ。これではたとえ寄せて行つたとはかばかしい勝利の得られることは先ずござるまい。し

かしながら、味方も寄せず、敵も寄せずして、冬を越しては各々が今仰せられた通り、敵に力を添えることになります。しょせんは、近日中に敵をして押寄せさせればいいわけでありますが、それについては、また策があらうではござらんか。おたがい工夫してみることにしてはいかがでありましょう」

といった工合に説いた。

その説得のたくみさに、景虎は心中驚嘆していた。

この豪族らは表面の名義は守護代の催促に応じて集つたのだが、内実は勝敗利害の打算によって馳せ参じたにすぎない。彼らが打算の観点をかえれば、きわめて容易に反対の算出をし、敵に寝返りを打つこともあり得る。結合の紐帯きんたいはいたつて弱いといわねばならない。つまりは烏合の衆だ。

しかも、この烏合の衆に強力な命令権を持つ者は誰もいない。名義上では守護代たる晴景が持っているはずだが、守護代という名目だけではその力のなくなっている時代だ。実力者でもあつた為景の時代すら、ややもすれば反抗する者があつたのだ。為景の四半分の実力もなく

なっている晴景ではおぼつかないことは言うまでもない。

こんな連中を説得するには、決して高圧的な態度に出るはならない。もどかしくとも、齒がゆくとも、彼らの自尊心を満足させながら引きまわして行くよりほかはないのであるが、その点、定行の説得よりは巧妙をきわめている。

定行は「おたがい工夫してみることにははいかがでありますよ」と言っているが、景虎の見るところでは、定行にはもうその工夫はついており、彼の現在の努力は皆に共同の謀議によってそこに達したと信じさせることと、誇りと責任とを持たせることにあると思われる。

自分の生来の性質が性急で、相当かんしゃく持ちであることを自覚しているだけに、景虎には定行のこのやり方がひとしお感心され、心をすまして見ていた。

「敵をさそい寄せるとすれば、弱きを示す必要があると存ずる」

と一人が言った。

定行は丁とひぎをたたいて、

「それそれ、そこが計略の中心でござるな。さなきだに優勢に心驕っている敵、当方弱しと見ては、かきにかかつて来ずにはおられますまい。よいご工夫」

と、ほめた。

「三条の領内に多少の兵をくり出して一合戦し、いつわり負けて逃げかえるというはいかがでござろう」

と、また一人が発言した。

定行は軍扇でハタと手のひらをたたいた。

「妙案！ 弱きを示し、さらにこれを激発させる。だんだん形をなして来ましたな。しかし、いつわりにしても負けるというのはいかがでござろう。世間にほんとの負けと思われては、形勢観望のやからを敵につかせることになりましょう。今一工夫をわずらわしとうござる」

たとえば老練な教師が子供らと一問一答をくりかえしながら、正しい解答に導いて行くように、定行は自らの工夫を豪族らから引出した。これは、三条領内に小部隊の兵をくり出して部落を焼き、財物をうばい、三条勢が駆けつけぬ間に迅速に引上げることのくりかえすという

策である。

定行は晴景の方に向きなあって、うやうやしく言った。

「ご一同のご工夫にて、やっとここに達しました。これならば、気早の俊景殿のこと、激昂して寄せまいられること必定と存じます。唯今のところ、これ以上の策はないと存じます。衆智の一致しましたところ、何とぞご決定のほど、お願い申し上げます」

「よからう。衆目の一致したところじゃ。おれになんの異存があろう。皆々はげみくれるよう」

と、晴景は言った。

三

当時のことばで「焼きばたらき」という。敵の領内に攻め入って、民家を焼きはらい、田畑の作物を焼きあらすことだ。季節が季節だし寒国のことだから、田畑には作物はないが、村落は徹底的に焼きはらった。二十人か三十人が騎馬で来て、二部落か三部落を焼き立てては引上げた。おりしも寒氣日にます季節だ、住居を焼かれた

百姓らの迷惑は一通りではなかった。訴えは日々櫛の齒をひくように三条城にとどく。その度に三条の方では討手の兵をくり出したが、風のように襲来して風のように去る騎馬隊だ。姿さえ見ることが出来ない。素速い蚤にせせり立てられる気持であった。

戦き上手の俊景はこれが敵の誘いの手であることは十分に知っていたが、がまん出来なくなった。

「なにほどのことがあろう、ただ一もみにもみつぶしてくれん」

と激怒して、栃尾進発を決定した。総勢一万三千、兩隊にわかつて、七千を自らひきい、六千を黒田和泉守国忠にひきいさせる。

三条領内に放っている謀者や、盆地の諸入口に構築した諸寨から、急報は続々と栃尾城にとどいた。

城ではかねての部署にしたがって、それぞれの持場をかためた。それぞれ城を少し出て、逆茂木をひいたり、柵を結ったり、土俵を積んだりした。

景虎は、その持場である搦め手の門を出て四、五丁行ったところに刈谷田川があつて、敵がこの川を渡つて来

ることが必定と思われたので、いささか城を離れすぎるが、川を前にあてて陣所を構築した。冬のかかりにはよくあるおだやかであたたかい日がつづいて、工事はおもしろいほどはかどったが、まだすっきり出来上がらないうちに、三条勢が三条を出発したという報せが入った。

「さあことだ、急げ急げ！」

それまでは番の者だけを泊らせて、あとは夜になると城に引きとっていたのだが、その夜は幕舎を張って全員泊りこみで、交替で夜とおし働き、翌日の昼を少し過ぎた頃にやっと終わった。

「もう大丈夫、いつでも来い」

一同手ぐすねひいて待ったが、その日はついに敵影を見ずにおわった。

「気を張りつめたあとには必ずゆるみが来る。そこを狙って奇襲されて不覚をとったためしは、古来の戦さに少なくない。油断は禁物だぞ」

宇佐美は三条からのすべての道筋にいく重にも見張りを出し、陣地にはさかんながり火を焚き、不寝番を置いて交替できびしい警戒をさせたが、その夜の夜明けに

近い頃から、烈風とともに、乾いた雪が降り出して、おそろしい寒さになって来た。

景虎は幕舎の屋根に立つ風の音と寒さのために目をさましたが、すぐ起上がって外に出た。

悲鳴のようにひゅうひゅう鳴りながら吹きつける烈風に、雪が横なぐりになぐりつけてくる。刺すような冷たさだ。忽ち頬も手もこごえてしまった。その頬と手を強くこすりながら、景虎は空を仰いだ。まだ日の出には遠い空は低く真暗だ。雪にはまるで湿気がない。細かで灰のようにさらさらして、強い風に吹かれては吹きだまりに吹きやられ、見る間にそこに積もって行く。根雪になる雪と見てよかった。

隣の幕舎から定行がしわぶきながら出て来て、これも空を仰いで立った。真白なひげがなびき、近年一層やせの目立つかばそいからだは風に吹き飛ばされそうに見えた。

「駿河、この風、いつまでつづくと思うか」
と、景虎は聞いた。

「根雪になりましょう」